［論文の要約］

小島成斎の書学と書法に関する研究

平成２５年度

田 村 南 海 子

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

研究の背景

小島成斎〈1796-1862〉は、始め市河米庵〈1779-1858〉に学び、後に狩谷棭斎〈1775-1835〉に師事して説文学を修め、とりわけ中国唐代の虞世南〈558-638〉風の楷書書法（以下、虞法）に秀でた書家である。江戸後期から明治における一書流を形成し、巻菱湖〈1774-1863〉、貫名菘翁〈1778-1863〉、市河米庵らと共に幕末の四大家の一人と称されることもある。しかし、他の三者に比して言及されることは少なく、著述や制作に関して不明な点も多い。このため成斎に関する資料を収集整理し、日本書道史上における位置付けを明らかにすることは、江戸後期唐様の包括的理解への一助となろう。

江戸時代における唐様は、儒学や漢籍の浸透と共に知識階級を中心に隆盛した書芸術である。このため唐様について考察することは、中国書法受容の歴史を振り返ることであり、現代の書の源流を知ることでもある。特に古典を学ぶ方法や、それを踏まえた書法において、当代の水準の高さは看過出来ない。明治以降、御家流が急速に衰退する一方で、唐様は現在にも通じる書学を実践しその基盤となってきた。先行研究が十全とは言えない江戸後期の書を、書人別、書体別に精査し、日本書道史上に追記することも必要であると理解している。

本稿の目的

本稿は、江戸後期の唐様書家である小島成斎の書について、主に書学と書法の観点により考察を加えるべく、成斎に関する未公開資料を多数提示し、書作品等の現存状況を把握すると共に、中国の伝統的書法が当代においてどのように受容され、制作に応用されたかの一端について論述するものである。

その上で、成斎が日本書道史上における唐様の分野にいかに位置付くかを明示することを目的とする。

章立て

目次

凡例
序　本稿の目的と方法 ……1
　1　小島成斎に関する先行研究 ……1
　2　小島成斎に対する評価 ……6
　3　本稿の目的と方法 ……9
第１章　小島成斎の生涯 ……13
　第1節　小島成斎の生涯 ……13
　第2節　市河米庵から狩谷棭斎への師承転換 ……25
　第3節　姓名字号と改名時期 ……32
　小結 ……39
第２章　小島成斎の書学 ……48
　第1節　著作の現存状況 ……48
　第2節　法帖の刊行と釈文の校定 ……69
　小結 ……79
第３章　小島成斎の書 ……102
　第1節　成斎の書の現存状況 ……102
　第2節　書風の変遷と時期区分 ……108
　第3節　論書詩に見る各体の書 ……125
　小結 ……137
第４章　小島成斎の書における虞法 ……141
　第1節　虞法所用の書の現存状況と特徴 ……141
　第2節　成斎の学んだ虞法 ……149
　第3節　虞法を能くした書人との比較 ……153
　小結 ……159
第５章　小島成斎の用印 ……164
　第1節　印の使用年代の考察 ……164
　第2節　成斎の押印様式 ……186
　第3節　無紀年作品の推定揮毫年代 ……190
　小結 ……202
結　総括と今後の課題 ……204
参考文献 ……211
小島成斎略年表 ……226
図版編 ……233
　1　著作･石刻資料 ……233
　2　書作品・手本類 ……281
　3　門人の書 ……346
謝辞

各章の概要

序　本稿の目的と方法

小島成斎に関する論考に、今関天彭〈1882-1970〉「山梨稲川」(『書苑』第 2 巻第 7 号、1939 年）があり、「稲川先生山梨君墓銘」は成斎が師･狩谷棭斎の代筆をしたものであることが明らかにされた。しかしこの他にも成斎は、市河米庵、松崎慊堂〈1771-1844〉、阿部正弘〈1819-1857〉、杉本望雲らの代筆を行っていることを指摘し、更なる研究が求められることを述べた。また、従来棭斎の書とされてきたものの中には、棭斎の娘俊〈1810-1857〉の代筆もあり、それらが混同されてきた状況を整理した。

成斎に対する評価については、前述の幕末の四大家の他に、今体派の殿、晋唐派、古体派、文字学者、虞法の第一人者、小島流の祖など、各々の面から言及されてきた。しかし包括的には明確でないため、書学と書法の両面からの考察を要することを述べた。

第１章　小島成斎の生涯

成斎の生涯について記述する資料は、樋口銅牛〈1866-1932〉「小島成斎伝」(『書苑』第 2 巻 3 号、1912 年）や昭和 33 年（1958）の相沢春洋〈1896-1963〉「小島成斎」(『相沢春洋著作集』所収、1975 年）などが挙げられる。「小島成斎伝」は「小島成斎先生墓表」の記述によって生卒や事跡の概略を記載するため、平凡社版『書道全集』(1932 年、1958 年）や辞典などに引用されてきた。しかし、五弓豊太郎『事実文編』(1911 年)や海保元備『伝経廬文抄』(1928 年）などに掲載される資料との異同が認められる箇所もあり、精査を要すると考えられた。このため、一次資料である拓本「小島成斎先生墓表」を底本として、文献や伝記との勘合を行い、成斎の生涯について把握した。また、誤読と見られる伝には訂正を加え、巻末に「小島成斎略年表」を付した。

これにより「俊蔵」「親咸」と表記されることがある成斎の父の名は、正しくは「親蔵」であろうこと、初号とされてきた「静斎」は、後の「成斎」と同時期の使用が認められるため、音通による表記の可能性があることを述べた。また、書作品や著作についても整理し、門人の書も含め 137 点の資料を掲載した（図版編)。また号･室号は、現在までに確認されているものに加え、新たに「負丘山樵」「遥琴楼」「集成書院」「韓心精舎」「龍門精舎」も用いていたことを見出した。

さらに、成斎が米庵門を去った時期については、姓名字号を改めた時とほぼ同時期と見て、22-23 歳頃との見解を得た。成斎の軸作品中に、米庵の『墨場必携』が出典と見られる句が少なからず確認出来ることや、門弟に対して米庵の

行書手本を勧める記述があることからは、米庵の書法を「皆な棄去りて顧みず」（「小島成斎先生墓表」）とする伝は、過言であろうことを明らかにし得た。

第２章　小島成斎の書学

成斎の著作は、墓表に記される書物や『国書総目録』掲載のもの以外に、書道手本や法帖、写本類が存在し、その多くは個人の収蔵家により収集保管されている。これらを集成して年代順に整理し、考察を加えることにより、成斎の書法の礎となった書学の推移を把握した。

この結果、成斎の一連の法帖刊行や、その釈文で従来の誤りを訂正した業績は、当代の書法理解に有意義であったと認められた。また、集帖を手習いの教材として用いるのみならず、考証の対象として捉える姿勢が見られることは、清朝考証学受容の成果を応用し、唐様の水準を向上させたものであると評価出来た。釈文に考証を加えるという概念は、単なる受容とは異なり、校勘と選別を加えるものである。このような書学は、師であった米庵には見られず、椒斎の学を受けた成斎の先見性であり、教育者としても卓越していると考えられた。

清朝における学問、芸術の隆盛が、江戸後期の知識人に影響を与えたことは周知の通りであるが、日本書道史上においては、校勘を伴う古典受容として成果を上げ、成斎の出版事業も書学の進展に寄与したことを認めた。

第３章　小島成斎の書

第 1、2 章の考察結果を受け、生涯を通じての書法の変遷について考察し、作品中に見る論書詩の内容や墓碑の記述内容との対照を行った。この結果、成斎の書は大きく 3 期に分けられ、第 1 期は米庵に師事した 17-22 歳、第 2 期は 26-58 歳、第 3 期は中風に罹って以降、没年までの 59-67 歳であると考えた。第 1 期の書風は、楷書･行書共に完成度の高い米庵書法が見られた。第 2 期は、椒斎に師事し、楷書は虞世南に範を取った。また、虞法の他にも開成石経に基づくと見られる書があり、用途に応じて依拠する古典を選択する傾向があることが把握出来た。行書は王羲之〈303-361（異説有り）〉に傾倒し、晩年までそれを貫いた。第 3 期は、運筆の衰えが感じられて以降、顔法へと転じた旨が墓碑に記されるが、書法にもこれが表出していることを確認した。これにより晩年に見られる精緻な虞法は、門人による代筆の可能性があることを導いた。

第４章　小島成斎の書における虞法

第 3 章で考察した書の中、特に有名な虞法について抽出し、歴代の書人との書法比較を行った。成斎は虞法を能くしたことで知られるが、その書道史的な位置の考究は十全でないため、学んだ手本や前後代の書人と比較しての完成度、といった観点により考察を行い、門人への影響を具体的に探ったものである。

まず虞法で書かれた書の中から、40 代の書風の異なる 2 点と、50 代に版行した『真書千字文』、中風に罹った後の『大統歌』の計 4 点を比較し、最も書技が熟達した時期は 50 代であろうとの知見を得た。これにより第 2 期を書法の練度により前後に分け、凡そ 26 歳-40 代前半を第 2 期前期、40 代後半-58 歳までを第 2 期後期と区分した。

また成斎の虞法は、凡そ孔子廟堂碑に基づくと解せられ、基本点画や結構法においては、沢田東江〈1732-1796〉や高橋泥舟〈1835-1903〉らよりも完成度が高いと捉えられた。成斎特有の個性を生かしつつ、古典を自身の書へと昇華させる倣書の手法が、当代において徹底してなされていたことは特筆すべきであると考えられた。

第 5 章　小島成斎の用印

本章では、成斎の用印について言及した。印の総数と個々の印の使用時期・回数を明らかにすることにより、真偽の鑑定や無紀年作品の年代推定の基準となり得ることが確認出来た。また署名の上に押印するという、現在ではあまり用いない押印法が見られるため、典拠を考察し、古典に則る各体の書と同様に、私印が用いられる初期の頃とされる宋元代の様式に従ったものであろうとの確証を得た。

最後に、本稿での考察結果に基づき、無紀年の楷書作品「胸中有書」(『江戸の書』所載、2010 年）の揮毫年代の推定を試みた。書風、印、詩句の内容等を検討した結果、書法が最も熟達した第 2 期後期の書であろうと捉えられ、成斎作品中における代表作の一点とされるべきものと認めた。

結　総括と今後の課題

小島成斎の書は、市河米庵門下で書法の基盤を確立し、その後開成石経や孔子廟堂碑を主とした中国の古典的な学書へと移行し、狩谷棭斎より説文学や考証学をも享受することで独自の書を形成しており、その完成度は 40 代後半-58 歳頃が最も高いと言える。書論による従来の書学に加え、文字学の成果を制作へと応用したことは、学芸一体の書を実現したものとして日本書道史上に位置付けられ、中国書法の理解と実践において意義が認められた。教育者としても、学問的見地により釈文に校定を加え、社会へ提供した業績は大きく、優秀な門人を輩出した成果と共に、高く評価されてよいことを述べて結びとした。